

内藤淳の『自然主義の人権論』は本人も著書で指摘するように(pp.241-242)進化生物学の見地を日本の法学あるいは哲学・倫理学に導入するという点で先駆的な業績であり、また倫理学でしばしば道德の動機付けの要素として用いられる「欲求(desire)」の概念を進化生物学に依拠した人間の本性や本能である「繁殖」として捉えることで、単独の個人だけでなく血縁関係や繁殖資源を提供する集団に互惠性が生じる仕組みをうまく説明できるという理論的可能性を持っている。進化生物学の見地を道德理論に応用しようとする試みあるいは自然主義の道德理論は特に米国で盛んであり、また野家啓一が「科学と哲学は本来対立するべきものではない。(中略)科学と哲学とが「棲み分け」た上で「交易」を盛んにするという道もあるであろう」¹と述べるように、このような異分野同士の相互交流自体そのものは学問的にとても有意義なものであるということに私も同意する。ただし(哲学の性質上?)、内藤の議論が前提としているいくつかの事項に対して懐疑的にならざるを得ず、内藤の進化生物学的な道德・人権の説明がある部分では説得力をもつものの、ある部分では説得力が薄いように感じられる。以下において、内藤の理論のキータームである「繁殖」概念に特にスポットを当てて、自分が内藤の議論に説得力の弱さを感じている部分を論ずる(またそのことが結果的に「相互交流」につながると考える)。

1. メタ倫理学上の動機付けの問題と正当化の問題の混在？

道德の動機付けの問題²と道德判断の正当化(客観性)の問題の区別は、英米圏のメタ倫理学ではしばしば問題となり、Thomas Nagel, Michael Smith³などの論者は特にこの問題を重要視する。例えば私たちはある道德が正しい(=道德の正当化の問題)ということを知りつつ、その正しいとされる道德に従いたくない(=道德の動機付けの問題)ということが日常生活でしばしば起こりうる。もちろん道德の正当化がそのまま動機付けにつながると主張する倫理学上の立場があり、例としては有徳な人は道德判断に対して正当な理由付けを行なえばそれがその人の道德の動機付けになるという主張がある。この主張をメタ倫理学では内在主義(internalism)と呼ぶ。その反対の立場として道德の正当化が道德の動機付けにそのままつながらないという主張があり、この立場を外在主義(externalism)と呼ぶ。内藤の議論の場合、(後で詳しく論じるが)その主張は基本的に「外在主義」であり、正当化と動機付けは別の問題として区別して論じなければいけないというのが私の主張・解釈である。

¹[野家 2003 p.4]

² 特に道德の動機付けについて研究する分野を moral psychology (道德心理学) と呼ぶ。

³ 特にマイケル・スミスは「動機付け理由」と「規範理由」を区別し、「動機付け理由」に関してはヒューム主義を受け入れるべきだが、後者については受け入れるべきではないと主張する。このことを論じた著作として[Smith 1994]を参照。

この区別の問題は道徳を生物進化のアナロジーに依拠する道徳理論にしばしば批判が向けられる生物進化のスピードと文化/文明が変化するスピードが違いすぎるというタイムスケールの問題とも私見では恐らく関連性がある。内藤の議論は特に道徳や人権の動機付けの問題に重きが置かれているため、人権の普遍性の論証は常に過去や歴史的なデータに依存する（特に第5章）。これは、より「繁殖資源の獲得」から離れた人権であると思われる「社会権」が「自由権」よりも後に考えられたものにも関わらず「自由権」よりも急速に広まったのはなぜかという問題や、より「繁殖資源の獲得」から離れた新しい権利（e.g. 同性愛者の権利、障害者の権利、動物の権利、更なる人類の未来においては、ロボットの権利？）をどう説明するのかという問題を生み出すように思われる（レジュメの1.2.の項も参照）

1.1.内藤の「繁殖」概念を人権や道徳の動機付けの問題と考えた場合

道徳の動機付けの問題として考えた場合、内藤の議論にはある程度の説得力と妥当性が認められ、特に過去の「人権」概念形成過程に関する論証には説得力があるように思われる。これは道徳の動機付けに関する「ヒューム主義」⁴か？

→内藤の「繁殖」概念は動機づけに関するヒューム主義か？

メタ倫理学における動機付け問題において、行為主体が世界を認識する（がゆえに真偽が問える）「信念(belief)」と、行為主体が世界を変えようとする（がゆえに真偽が問えない）「欲求(desire)」との心的状態の組み合わせが道徳の動機付けを生むという理論であり「ヒューム主義」と呼ばれる。内藤の議論においては「繁殖」の概念がヒューム主義の「欲求」に相当し、繁殖資源獲得のための「合理性」が「信念」に相当するのではないかと考えられる。「ヒューム主義」は英米の倫理学でかなり有力な立場であるが、もし内藤が動機付けに関するヒューム主義をとるのであれば、動機づけに関する反ヒューム主義⁵の立場も検討しなければならないのではないかな。

1.2.内藤の「繁殖」概念を人権や道徳正当化の問題と考えた場合

道徳判断の正当化の問題と考えた場合、内藤の理論にはやや無理があるのではないかな。道徳判断の正当化の問題の場合、未知の新しい道徳や人権（法的価値）にしばしばその道徳判断の正当性の説明をしなければならない。「繁殖」概念だけでは正当化の問題の解決は困難なのではないかな？

⁴ヒューム主義についてわかりにくいと思われるため、やや簡単にヒューム主義について説明する。「信念」は世界をそのまま捉えようとする心理状態であり真偽という観点から評価することができ、「欲求」は世界を変化させようとする心理状態であり、ヒュームは道徳の動機付けにおいてこの2つの心理状態は区別できると主張したとされる[Smith1994 (邦訳)pp.13-14][田村 2003 pp.59-60]。すなわち、ヒューム主義においてはそもそもの行為主体の「欲求」という目的が存在し、「信念」が「欲求」の方向性をやや修正し道徳の動機付けを行なうとされる。そのため、動機付けのヒューム主義の立場をとる論者は外在主義の立場に立つことが多いと考えられる。

⁵ Thomas Nagel, John McDowell などが主な論者とされる。主な参考文献として [Nagel 1970] [McDowell 1998]を参照。行為者の道徳判断が「信念」のみによって動機づけられる可能性を認める立場だとされる。（あくまでも「信念」で動機づけられる可能性を認めているだけで、「欲求」で道徳の動機付けが行なわれる可能性を全否定しているわけではない）

→自然主義による「人権」の正当化の問題の困難

道德判断の正当性の問題は、換言するならば道德判断の真偽や善悪を問うということである。動機付けにおける「ヒューム主義」をとった場合、人間の「欲求」(＝内藤の「繁殖」概念?) そのものは真偽や善悪が問えないため⁶、真偽が問える「信念」(＝内藤が主張する繁殖資源獲得のための「合理性」?) のみが道德判断の正当性を判定する際に機能すると考えられる(つまり道德の正当化に「欲求」が介在する余地がない)。そのため、自然主義かつ「ヒューム主義」の論者はしばしば動機付けの問題と正当化のギャップの問題に悩むことが多いと指摘される。

また、メタ倫理学上で内藤のような自然主義の立場をとる論者の場合、多くの場合人権のような権利基底的な道德ではなく、規範倫理上では功利主義の立場をとることが多い。例えば、内藤が主張する人間の本性や生得的な性質である「繁殖資源の最大化」や「快」を功利主義の「功利性」(utility)や「厚生」(welfare)と同一視すれば、道德の動機付けの問題をそのまま道德の正当化の問題に結びつけることが比較的容易である⁷。しかし内藤が目指すのは自然主義による功利主義の正当化ではなく、あくまでも人権の自然主義による正当化であり、更に困難な問題である。これは恐らく道德や権利の正当化の問題が 未知の問題や新しく提唱される権利や道德観念をどのような基準でその妥当性を判定するのかという問題と深く関わっているからである。内藤は繁殖資源の配分の問題(第 6 章)による論証でこの問題に挑戦しているが、現在人々の間で対立しているような権利の問題、例えば(先にも述べたが)「繁殖」を行なわない「同性愛者の権利」、「繁殖資源」を提供しない「障害者の権利」、そもそも人間とは種が異なる「動物の権利」といった新しい権利は「繁殖資源の獲得」からどんどんかけ離れており、内藤の理論はそうした問題に判断基準を提供できるのか⁸、という疑問がある。

2.人間の「言語」や「思考」がそもそも生物学的な「エラー」ではないか。

「言語」は、内藤によると人間の「本能」に付属するサブシステムであると主張する(p.86)。こうした内藤の主張の背景には、「生物としての人間」(pp.124-133)という他の生物と人間との連続性を訴えたいという独自の立場があると思われる。しかし私見によれば特に人間特有の言語的コミュニケーションは内藤が考えるほど些細な問題ではない。しばしば「言

⁶ もしくは「欲求」(＝内藤の「繁殖」概念?) そのものを全肯定するしかない。その場合、ヒューム主義は全ての道德に関わる行動は「欲求」を介在させるわけだから、「我々の道德に関わる行動は全て正しい」という道德の正当化(客観性)に関して我々の持つ直観に反する結論が導かれるのである。

⁷ [安藤 2007 p.142-157]は功利主義の「功利性」を人間の「快」や「欲求」と結びつけようとする議論を行なっている。もっとも「統治理論としての功利主義」を彼は主張しているので、道德の正当化の問題の一例として彼の議論を語るのは、彼の議論の文脈からはふさわしくないかもしれない。

⁸ もちろん「同性愛者の権利」において同性愛者(繁殖はしないが)は繁殖資源を提供する、「動物の権利」は種の多様性そのものが人間の繁殖資源獲得機会を大きくするという反論を内藤の議論の枠組で行なうことは可能だろう。しかしそうなればなるほど、「繁殖」「繁殖資源」の概念が広く曖昧になってしまい、結局のところ規範理論や道德の正当化理論としてはあまり役に立たないのではないか、という疑問が呈される訳である。

語論的転回」(linguistic turn)と称されるように特に英米圏の分析哲学者は人間と言語の問題を重要視してきた。

→言語そのものが人間の思考や感覚のベースである可能性があるのではないか。

2.1.言語と思考の関係

Donald Davidson は「合理的動物」という論文で、言語を持たない動物が思考できないという議論を行なっている。Davidson は信念同士が結びつくことが、人間の思考を生むと主張する。さらに信念の概念を生みまたその人間の信念同士を結びつけさせるのは Davidson によれば「言語」である。Davidson によれば人間の「言語」コミュニケーションそのものが人間の合理性を生むとされる⁹。

2.2.言語と感覚の関係

「言語なしに思考する」ということが想像できないように言語と思考が深く結びついていることはしばしば指摘されるが、人間の感覚と言語が結びついているということはあまり指摘されないことのように思えるので、以下のような軽い思考実験を行なってみる。例えば日本語の「凝る」という言葉にあたる言葉が存在しない言語が流通する文化に暮らす人々を想像してみる。その言語に暮らす人々においては日本語では「肩が凝る」という表現される感覚を、全て日本語の「肩が痛い」に相当する言葉で表現していたとしよう。その場合、その文化に暮らす人々は「肩が凝る」という感覚を認知することができるのだろうか？→本来、人間に生得的であると思われる「感覚」ですら、後天的で社会的な「言語」によって分化・区別されて人間に認知されている可能性がある¹⁰。

2.3.人間の言語や思考の自律性

恐らく、そもそも「言語」や「思考」は内藤が主張するように人間の本能のサブシステムに過ぎなかったのだが、時間が経過するにつれある種の自律性(autonomy)を持つようになったのではないか。現在も「言語」や「思考」はそもそもの人間の本能と関わっている部分もあるが、それとは独立したメカニズムとして機能している可能性がある。例えるのであれば、人間の「言語」や「思考」は、(やや SF 的な設定になるが) 人間の世話や下働きをする目的で設計された人工知能付きのロボットが、やがて人工知能そのものが自律性を持ち当初の目的とは相反する行動を行なうようになり、逆に人間を支配し始めるようになる設計・システム上の「エラー」や「暴走」に似ていると思う¹¹。先に論じた(1.1.の項を参照)反ヒューム主義者の「信念」のみによって道德の動機付けが行なわれる可能性を認め

⁹ [Davidson 1983]

¹⁰ これに関する議論として「痛み」に関する感覚語と私的感覚の関係について議論を行なったとされる Wittgenstein の議論も参照[Wittgenstein 1953 § 244]。

¹¹ ドーキンスの『利己的な遺伝子』の議論が主張するように仮に我々の生体システム・本性が自らの遺伝子を増殖するようにプログラミングされているのだとすれば、実際にそうしたプログラミング上の「エラー」や「暴走」の近未来に起こりうる事例として、遺伝子の「乗り物」に過ぎない人間が自らの遺伝子そのものを組み換えてしまうという可能性が考えられる。こうした可能性はヒトゲノム解読プロジェクトのニュースなどを考慮すれば、決して（倫理的問題は別として）遠い未来の出来事とは言えないと思われる。

るのであれば、欲求や人間の本能で初期の段階では道德の動機付けが行なわれているのだが、徐々に人間の言語やそれに伴う思考が発達するにつれ、言語や思考そのものが自律性を持ち、人間の欲求や本能を介在しなくても人権や道德の動機付けがなされた可能性があるというわけである。「人権」はこうした「言語」や「思考」という(現在の理論的枠組みにおける)生物学上の「エラー」による副産物なのではないか？

(参考文献)

- [安藤 2007] 安藤馨『統治と功利』(勁草書房)
- [田村 2004] 田村圭一「道徳的な実在論と道徳的な動機づけ」『思想』2004 年 5 月 961 号 pp.59-74(岩波書店)
- [野家 2003] 野家啓一「思想の言葉：現代哲学の対立軸」『思想』2003 年 4 月 948 号 pp.1-4
- [Davidson 1983] Donald Davidson “Rational animals” reprinted in his 2003.
- [Davidson 2003] Donald Davidson, *Subjective, intersubjective, objective*, Oxford University Press.(邦訳：清塚邦彦他訳『主観的、間主観的、客観的』春秋社 2007 年)
- [Nagel 1970] Thomas Nagel, *The possibility of Altruism*, Princeton University Press.
- [McDowell 1998] John McDowell, *Mind, value, and morality*, Harvard University Press.
- [Smith 1994] Michael Smith, *The moral Problem*, Blackwell.(邦訳：樫則章監訳『道德の中心問題』ナカニシヤ出版、2006 年)
- [Wittgenstein 1953] L. Wittgenstein *Philosophical investigation (Philosophische Untersuchungen)*, Blackwell.(邦訳：藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店、2003 年)